

独立行政法人国際協力機構理事長賞

アフリカに渡った折り紙

一関市立磐井中学校 1年

小山 桃子

「折り紙折ってくれない。」

母が唐突に私たち姉妹に声をかけた。幼稚園児じやあるまいし、何を今更と思って返事をしかねていると、続けて母が言った。

「JICAの事業でアフリカの学校を訪問する人がいるの。日本らしいものをお土産にと思ったけど、かさばらなくて壊れないもので折り紙がいいかなって思って、器用なあなたたちに頼もうかと。」

早速私たち姉妹は道具箱の底から折り紙を取り出し、折り始めた。器用な姉は私が1羽折るうちに2羽3羽と折り進める。

「アフリカってどこに行くの。」

「ルワンダだって。」

「ルワンダってどこ。」

「アフリカの真ん中くらい。」

自分の折った折り紙がどこでどんな人に渡るのか知りたくなり、ルワンダについて調べてみた。どんな資料を見ても、虐殺という文字が出てくる。貧富の差が拡大し紛争が起き、政治が不安定になり、その不安から100万人が虐殺される事態になったらしい。そんな悲惨な過去をもった国なのに「アフリカの奇跡」と呼ばれるほどの経済成長を遂げている。国が不安定な時に外国に脱出した人たちが帰国し、海外の技術や教育や知識を国内に広めたことから、この成長があるということだった。ルワンダでは女性議員が世界で最も多いと言う。憲法で議員の定数を30パーセント以上に定めているかららしいが、2008年には女性議員が過半数を占めたと言うから驚きだ。これは、世界初の画期的出来事なのだと言う。

「教育や知識を広めたことから『アフリカの奇跡』は起きた。」この一文に私は惹かれた。と同時に、自分との差に驚いた。私たち日本人は義務教育を9年間受け、高校や大学に行く人も多い。政治の大切さや男女平等であることなどは当たり前のこととしてとらえている。しかし、女性議員の割合は11.6パーセント、世界で147位なのだ。教育や知識を生かして経済成長や女性の社会進出を遂げているルワンダと比較すると、あまりにも日本の状況は貧弱な気がする。

私が折った折り紙は「援助」ということと共にルワンダに届くのだろう。しかし、「援助」された国の方が進んでいることがあることを忘れてはならないし、私たちがその国から学ぶ姿勢をもち続けることが必要だと思う。

後日、ルワンダから届いた写真は、青い制服を着た笑顔の男の子たちが折り紙の鶴を持っているものだった。笑顔の写真からいろいろなことを学んだ出来事だった。